

大学生のレポートに出現する「思う」と「考える」の機能について

—伝達の側面から見た問題点—

The Function of the Phrases “*Omou*” and “*Kangaeru*” in University Student Reports
-Focus on Conveyance-

川端元子

Motoko Kawabata

Abstract University students often express their own opinions in reports by using “*omou*” or “*kangaeru*”. However, in scholarly journals, such expressions are rarely used. Phrases that do appear in scholarly journals are those that demonstrate definite conclusions such as “*kangaerareru*,” “*to ieru*,” or “*ga wakaru*”. In other words, “*omou*” is a verb that indicates the author’s thoughts and judgment, however, the phrase is not often used in scholarly dissertations.

This investigation looks at the trends behind the appearance of the phrases “*omou*” or “*kangaeru*” in university student reports as well as the functions that are fulfilled regarding the action of using “I believe” or “*omou*” for arguments (from the perspective of conveyance). Through doing so, this paper examines the common reasons for both circumstances.

As a result of this investigation, it is clear that a lack of vocabulary that would help them precisely convey their ideas, lack of skill in logically assembling their arguments and ambiguous assertions are the main reasons behind the appearance of “*omou*” or “*kangaeru*” in university student reports.

1. はじめに

文末において次のように用いられる「思う」や「考える」は、これまでも森山（1992）¹⁾、宮崎（1999²⁾、2001³⁾）、高橋（2002）⁴⁾ などによって考察されてきた。

(1) 矢印は私たちの生活を私たちが思う以上に助けてくれているのではないかと思う。(S)

たとえば、森山（1992）は文の主観性と客観性に関わるものとして「思う」の二種類に言及し、宮崎（1999）はモダリティ機能を持つ「思う」の条件を考察し、高橋（2002）は引用句を伴う「思う」と「考える」の基本的意味と多義性をもとに、両者の弁別の特徴を導いている。他に、「と」を用いない準引用形式の「思う」「考える」の類似の形式について論じた藤田（1981）⁵⁾ などもある。

さきにも挙げた高橋（2002）においては、「思う」と「考える」の基本的意味の相違について整理されている。そ

の意味の違いを考慮すれば、それらは文章中での確に使い分けられることになる。しかしながら、大学生の作成するレポートには「思う」が数多く出現する。特に自己の見解を述べる場面においては、「思う」や「考える」を用いた文末が出現し、相互に置き換えても意味の違いを生じないように見えるものも多い。しかし、学術系雑誌に掲載されている論文では小数しか見られないものである。学術系雑誌ではデータからの必然的な帰結を示す「考えられる」や「といえる」や発見・確認系「がわかる」が出現する。つまり、「思う」は思考内容をマークする動詞という側面をもちながら、論述には多用されないのである。また、「考えられる」のようなラレル形は、「AがBをCと思う／考える」とは出現する文の構造が異なるため、伝達の側面で機能の違いが生じている。

そこで本稿では、「思う」と「考える」について、これまでの研究と合わせて両者の意味の特徴を整理し直す。そして、学術系論文の同様の場面で用いられる「考えられる」などとの使用環境の違いを考察する。これらをも

† 愛知工業大学 基礎教育センター（豊田市）

とに、大学生のレポートにおける「思う」が頻出する要因について、文章作成力と伝達のあり方の両面から明らかにしたい。

2. 動詞「思う」と「考える」の意味

2・1 引用句をうける「思う」の機能

森山(1992)は、「思う」「考える」「気がする」などの動詞が文末においてスル形で用いられた時、本来の意味よりもモーダルな意味を帯びることから「文末思考動詞」と呼び、その基本的意味を個人的見解の表示としている。そして、引用部分が客観的情報か主観的情報かによって、「思う」を付加しなければ客観的事実と認定できるものにつく「不確実表示用法」と、主観的判断や個人的な意見・意向などとなっている「主観明示用法」に分かれるとする。ただし、ここでの客観的情報か主観的情報かの区別については、情報が共通の知識となっているかという共有度や前提となる知識の有無や判断のあり方などに影響を受けるため、発話の場面を考慮する必要があるとしている。

宮崎(1999)は、工藤(1995)⁶⁾が「思う」のスル形のもつモーダルな意味を「態度表明性」としたことと同じ立場を取っている。これをもとに、「思う」の働きを、引用部分が評価的態度を表す文、認識的態度を表す文、行為志向的態度をあらわす文に分けて考察している。その結果、対象に対する評価を述べる文や当為判断をする文での「思う」は「態度表明性」の明示化の機能があり、判断のモダリティ形式を持つ文に付加する「思う」も、態度表明性の明示や強調となるとする。また、行為志向的態度をあらわす文に続く「思う」は「～よう」や「～たい」といった意志の表出や表明として宣言化する機能を持つとする。しかも、「思う」がついて自然になる場合は、意思決定が発話時点ではなく、事前に行われている必要があると指摘している。さらに、このような「と思う」のモーダルな用法について「述べ立て」(宮崎2001)であるとし、「と思う」の付加は文を思考内容化するものであると述べている。

2・2 「思う」を修飾する語句の性質

準引用について考察した藤田(1981)では、形容詞(句)に修飾される「考える」と「思う」について、形式的には似ているが修飾における意味的な関係が異なることが指摘されている。

(2) くわしく考える (藤田1981例文1)

(3) 美しく思う (藤田1981例文2)

(2)の場合は、「くわしく」が述語「考える」のありかたを規定する「外的修飾」、(3)の場合は、述語「思う」の内容が「美しい」になる(「美しいと思う」に置き換える)ことから、述語の内容を詳しく示す「内的修飾」

としている。そのうえで、内的修飾・被修飾の統辞関係を「準引用」としてその特徴を記述しているが、「考える」は外的修飾がほとんどで、この準引用の統辞関係が生じにくいことが述べられている。

また、修飾語句である形容詞について、属性形容詞・感情形容詞をそれぞれ直観的把握か思念的把握かによって、前者をモノ形容詞とコト形容詞、後者を感覚形容詞と感情形容詞に分類して、準引用のかんけいが成り立つか否かを考察している。それによれば、モノ形容詞と感覚形容詞、すなわち、直観的把握をするものについては「思う」と共起しにくいことが示されている。たとえば、「青く思う」「青い犬に思う」「痛く思う」「違って思う」などが不自然になるということである。他の準引用の統辞関係を構成する「見える」「聞こえる」「感じる」などは、修飾節が刺激の受容のあり方を示す述語と密接に関連しているのに対し、「思う」は修飾節と特定の関係を持ってない。その意味で、「思う」は刺激の受容のあり方を示すものではなく、刺激によって何らかの反応が形成されるものと想定できる。

2・3 「思う」と「考える」の相違

では、統辞関係の異なる「思う」と「考える」の相違はどのようなものか。副詞との共起をもう少しみてみよう。

(4) よく{思う／考える}

(5) あまり{思わない／考えない}

(6) もっと{思うことにする／考えることにする}

「思う」の場合、(4)の「よく思う」は頻度、(5)(6)の「あまり思わない」「もっと思う」は頻度の場合もあるが、「思う」強さの程度とも読める。一方「考える」の場合は、(4)は頻度読みもできるが、十分にという作業量の程度の大きさに、(5)は考える頻度、(6)は考える作業量の程度と読むことができる。

これらを比較すると、「思う」と「考える」には、その行為を回数で捉えることができる点で共通し、程度の大きさを考えるときには、「思う」が「思い方の強さの程度」、「考える」が「考える作業量の程度」として読まれることが分かる。

これは、次のようなテストで確認できる。

(7) 強く{思う／*考える} (*は不自然な文を表す)

(8) 時間をたっぷり使って{*思う／考える}

(9) 十分に{思う／考える}

(9)の「十分に思う」の「十分に」は、「思う」の内容や「思う」程度の強さともとれ、「十分に考える」ならば、「時間をかけて」という読みができる。「思う」が(7)で、「考える」が(8)で自然になり、それぞれが逆の読みをしないことと合致する。つまり、「考える」行為は「作業」だが、「思う」行為は「作業」ではないことを意味する。やはり、「思う」は対象や刺激に対する反応や印象と

いえる。

2・4 対話における「思う」と「考える」の機能

「思う」と「考える」の違いは次のような場面にも確認できる。たとえば、「考える」は次のような場面では使にくい。

- (10) あの人ひどいと思わない。
うん、{思う／*考える}。
- (11) 無理よ。私たちいくつ年が違くと {思う／*考える} の。
- (12) これまでどれだけ私たちに迷惑かけたと {思う／*考える}。
- (13) そんな馬鹿な話を誰が信じると {思う／*考える}。
(10) は「そう思う」「その通りだと思う」「ひどいと思う」という意味で、自分の意見を表明しているとはいうものの、相手の提示したものへのリアクションとなっている。また、他の例は「年の差はいくつか」や「どれくらい迷惑をかけたか」、「信じるのは誰か」といった実質的な回答を求めている訳ではない。当該の事柄をわかっているかどうか、認識しているかどうか、イメージできるかどうかを問うものである。質問者が答えの行き着く先を用意しているので、データをもとに結論を導く作業は求められていない。「考える」が使にくいのはこのためである。

また、次のような慣用的表現にも「考える」は出現しない。

- (14) 今泣いたかと思うともう笑っている。
- (15) やっと寝たと思ったのにもう朝になってしまった。この場合は、「〇〇と捉える」「あることを何らかの理由〇〇とみなす」という事態の把握とイメージの設定といえる。

一方、次のような場合には「考える」が用いられ、「思う」は不自然になる。

- (16) 赤もお似合いですが、白も上品でいいと思います。いかがなさいますか。
そうですね。迷っていますので、もう少し {考えます／*思います}。
- (17) 私の気持ち、受け取ってもらえますか。
少し {考えさせてください／*思わせてください}。

上の例は実質的な断りとして婉曲的に用いられている場合もあるが、結論を導くために時間をとって作業をする意味となっている。相手への返答・回答という意味ではリアクションであるが、「思う」は解答を導く作業をするものではないことが確認できる。

さらに、「思う」は「考える」に置き換えられる場合など、刺激に対する反応のあり方を他者から指定される場面以外では、命令・依頼文に使にくい。命令・依頼文が作業の指示となる「考える」とはこの点でも異なる。

- (18) 人を見たら泥棒と思え。
(cf. 人を見たら泥棒と考えろ)

- (19) ありがたく思え。
(20) *親ならば子どもを思え。(cf.子を思う親の気持ち、親ならば子どもの気持ちを考えろ)

このように、「思う」は主体が能動的かどうかに関わらず、頭に思い浮かべることやイメージすることなど事態の把握そのものであり、それに対する心のあり方や状態である。「考える」が結論や状態が不明なものを見つけるための行為（作業）であることとは異なる。

3 大学生のレポートにおける「思う」と「考える」

3・1 引用句部分のないもの

大学生のレポートにおいて、引用句をうけない「思う」や「考える」は次のようなもの場面で出現する。

- (21) しかしながら、人々が思う理想の道路が存在することとその道路が実在するまたは、実現することは、別問題であると考える。(S)
- (22) 「理想の道路」について考えるときに最初に思ったのが、交通事故状況であった。(S)
- (23) 毎日のように情報を扱っている私たちでも、なかなか思うように情報を伝えられない。(S)
- 引用句を持たない「思う」が文末にくることは少ない。助詞「と」をともなった「思うと」の形で「その情報を用いる人の立場を思うと不十分である」のように条件設定となるか、「思い通りにならない」や(23)のような連体修飾・慣用的な表現での出現が多い。
- 一方、「考える」は文末にも出現し、他には「～と」や「～ことは」、「～場合」を伴うなど、条件提示の形式や連体修飾が多い。
- (24) 車を運転するときはコンマ数秒が大事になるので、そう考えると若干ではあるが、図形として認識し即判断できる図1の方が、読んで理解するという行為が必要な図2より速く情報が伝わると言えるだろう。(S)
- (25) コミュニティ道路の利点、欠点をふまえた上で考えてみると、コミュニティ道路をただやみくもに増やせば安全な道路になる訳ではないことが分かった。(S)
- (26) この4つは理想を考える過程に含まれるはずだ。(S)

「考える」の対象は考察の対象であるとともに考察の過程や主題でもあり、「考える」は「考察する」、「検討する」、「分析する」、「考慮する」などの意味となっている。

二つの動詞の違いは、分析対象としてAを提示する「Aについて」や「Aをとりあげて」、データに基づく「Aをもとに」「Aに即して」などの形では、もっぱら「考える」が用いられることから分かる。

- (27) 今回は文字と矢印を例にして考えてみる。(S)
- (28) これらの中から、法定速度を簡単に超過してしまう道路について考えていく。(S)

「Aについて思う」は使われることもあるが、Aを漠然とあれこれ心に思い浮かべ、必ずしも結論を出す必要がないものである。

なお、上の(21)(22)の「思う」「考える」は置き換え可能である。特に、(22)は「考える」をすでに使用したために繰り返しを避けたとのことだが、用語選択の点で工夫の余地がある。

(22) 「理想の道路」について考察する際に、まず考慮すべきデータが交通事故状況である。

上は一例だが、「思う」と「考える」が頻出する背景には、的確にまた分かりやすく伝達するために必要な語彙の不足があるといえる。

3・2 「思う」と「考える」を修飾する内容

準引用の形式の「思う」を用いた例はあまりなく、引用内容が長くなると明確な引用の形式「と思う」が用いられている。

(29) ポテトとチョコレートを使った商品をなぜ作ろうかと思ったのか疑問に思っていた。(S)

この例で見られるように、準引用となっている「思う」のうける修飾節は短く、直近の語句「不思議」「疑問」「不可能」などが「思う」の内容となっている。

準引用になりにくい「考える」の場合、直前の修飾節は「考える」作業の方法や視点、あるいは主題となっている。

(30) 普段私たちが町中で出くわす渋滞とはどういったものなのかを考えていきたい。(S)

(31) ではなぜチョコが少ない製品を作ったのか考えるのと、いくつか予想できる。(S)

上の「考える」は「検討する」「考察する」「分析する」などと同義といえ、両者の違いは3・1で考察したことと同様の結果である。「思う」の引用句がその判断内容や心のあり方の認識と表明であること、「考える」がデータや視点を持った作業(過程)であることがここからも確認できる。ただし、この場合は2つの動詞を単純に置き換えることができないため、それぞれの動詞の基本的な意味をより反映していると考えられる。

3・3 引用句(節)をうける「思う」と「考える」

大学生の文章において最もよく使われるのがこのパターンである。事実として断定できないことや自己の見解を述べるとき、次の展開を予告する場面で用いられる。

(32) 記号と文字が別々でどちらか片方しか使われていなくても、しっかりと相手に意図を伝えることのできる場面もあると思う。(S)

(33) ポテトチップスを販売している会社は、味や販売方法などかなり試行錯誤していきすばらしいと思った。(S)

(34) 今回は矢印と文字の2つの情報の影響力について

詳しく考えていきたいと思う。(S)

このパタンの「思う」の出現傾向とその特徴を整理すると次のようにまとめられる。

自己の意見や主観的判断を述べる場合は、(32)や(33)のようにある対象について述べた他の文献の内容や資料・データなどを示したのち、それへの賛同・疑問・当為、是非などの評価・判断を述べるものである。時には判断主体「私は」を伴い、未実現や未確定のことであるため断定できない場面で個人的な見解であることを強調するように用いられる。もう一つは論理展開の予告として何をするのか述べる(34)のようなタイプである。これは思考から行為へ踏み出すことを宣言するものである。

後者は「思う」を付加しないことも可能であるが、前者は「思う」を「だろう」や「考える」など推量表現や他の思考動詞に置き換えることのできるものもある。ただし、(33)は「だろう」に置き換えると、「だろう」が思考内容に含まれてしまうので、「対象-それを取り上げる視点-判断-思考内容であることのマーキング」の関係が曖昧になってしまう。その結果、自分の心の動きでありながら、一般的な評価のようになってしまう不自然に感じられてしまう。

では、「考える」はどうか。

(35) 私は、情報の強さとはどれほどの情報を表せるか、その情報は他のものでも代用できるかという2点で決定すると考える。(S)

(36) 「理想の道路」は安全であることも大切だが、その道路を不自由なく使えることも大切だと考える。(S)

(37) 「→左を見よ」と書いてあるとする。この場合、矢印の後に結論が書いてあると考えることもできる。(S)

(38) R社の商品は量が少ない代わりに高いので、チョコの量を減らし、商品の値段を下げ、消費者が買いやすいようにしたのだと考えることができる。(S)

文末思考動詞として用いられる「考える」はほぼ「思う」に置き換え可能であった。なお、置き換えにくいものとしては、(37)(38)のような「AをBと仮定する・設定する」といったタイプがある。文末が「できる」と結んであるところに特徴がある。また、次のような「考えてみる」といった試行の意味を持つものも作業性があるため「思う」に置き換えにくい。

(39) では、なぜ言葉(文字)は分からない小さい子供でも矢印については理解できるのだろうかを考えてみる。(S)

なお、この例は次のように引用句をうける形や主題設定の形にも変形できる。

(39) では、なぜ言葉(文字)は分からない小さい子供でも矢印については理解できるのだろうかを考えてみる。

(39)” では、なぜ言葉（文字）は分からない小さい子供でも矢印については理解できるのだろうかということを考えてみる。

大学生のレポートにおいて「思う」と「考える」の置き換えができないばあいは、それぞれが引用句の有無にかかわらず、反応系の「思う」と作業系の「考える」の基本的な意味を持って機能している場合である。

3・4 大学生のレポートにおける個人的見解の表明

3・4・1 「思う」と「考える」の独立した用法

これまでのことをもとにまとめると、大学生のレポートに出現する「思う」と「考える」の出現傾向は次のようになる。

(40) 「思う」

- ①「～たい」「～よう」などについて次の展開を予告する場合。
- ②「気がする」「感じる」「思い浮かべる」「思いつく」などに置き換え可能で、引用部分が対象に対する心情や評価など準引用の統辞関係にもなれるものがある場合。

(41) 「考える」

- ①対象について何らかの方針や目的をもって「考察する」「考慮する」「分析する」「検討する」などに置き換え可能での作業性を伴う意味で用いられる場合。
- ②対象に適切な形容やラベルを与える、また、対象に想定できる特定の価値付けや意味付けを行う場合。このような場面と意味以外の「思う」と「考える」はほぼ置き換えが可能である

3・4・2 ラレル形の機能

これら二つの動詞以外では、「思われる」や「考えられる」が出現する。

- (42) このような文字情報を運転しながら瞬時に読み取することは困難なことだと思われる。(S)
- (43) 一方通行の標識は、文字と矢印で書かれているが、自分に置き換えて考えてみてもやはり、矢印の方を見てここが一方通行と知る。他の多くの人も同じ意見の人が多いと思われる。(S)
- (44) しかし、高速道路の中でも、中央分離帯があり、三車線以上であり、制限速度は100kmまで、カーブが少ない、ピーク時でも込み合うことがないなど、良い条件の整った道路は、理想の道路と呼ばれても良いと思われる。(S)

全体的に「思われる」の例は少なく、上の例の「思われる」は「思う」や「気がする」「感じる」に置き換えても意味上の変化はほとんどない。「困難だ」「良い」といった評価を判断内容としているうえに、その判断が「自分に置き換えてみても」の語句が示すように「自分の感覚」を基準にした評価となっている点で「思う」とよく

似ている。

一方、「考えられる」は「思われる」より多く使われている。

(45) しかし、自動二輪専用道路を実現するにはさまざまな問題が考えられる。まず、自動二輪専用道路をつくるには土地の問題がある。(S)

(46) 最後に、ここでは「線分（直線の）を主なパーツとする」といった条件を設定したので当てはまらないが、曲線を使用した図形が作成指示しにくいものの一つとして考えられる。(S)

(45) (46) は、「考え得る」「仮定できる」「想定できる」などに置き換えられる。しかし、次の例は「思う」に置き換えが可能なタイプである。

(47) まず、「一方通行」という情報は、免許を取る際の常識ということで理解できたと考えられる。(S)

(48) そもそも作者はどの語句に注目してほしいのかが分からなくなるとということが問題であると考えられ、以上の2つを改善すれば読者が理解しやすい説明文になると考える。(S)

(49) 決め手の調味料をつくる苦労は私には分からないが、これだけだと企業側の開発コストが低いと考えられる。(S)

(50) 今回の場合で言い換えるならば、移動する際に矢印あるいは矢印のある標識や看板の情報をどう行使するかが、今後ではなく、過去・現在・未来における課題であると考えられる。

これらの「考えられる」は、「まず」「そもそも」などの副詞や、「しかし」「そして」などの接続詞で始まる文に出現し、問題点を検討する初期段階での「考える可能性」を提示している。(48) (50) の「考えられる」は、「ある」に置き換えるか、「ある」に続くそれ自体を削除してもほとんど意味は変わらない。先行研究にある「思う」の機能と同じく、ラレル形が自己の思考内容であることをマークする機能を持っていることを示す。さらに、ここにはラレル形の特長「あるものによって自分がそう考えることは自然な流れであった」とする意味合いを持たせる効果、すなわち、客観的な証拠（論拠）を示せば、単なる可能性の提示から蓋然性の高さの表示へと意味合いが変わることが期待できる。しかしながら、論拠不十分な場合は、自己の問題設定を一般常識的な視点からの記述にみせかけるポーズにとどまる。

論拠の不十分さと関係するのが、主体の挿入である。

(51) そして、矢印の力の反発はとても難しく不可能に近いと私は考える。(S)

(52) 高速道路とは、信号機、一時停止標識に止められることなく快適に運転することができる。自分の好きな時間に休憩がとれる。これ以上充実した道路は他にない。これは理想の道路と言えるのではないかと私はそう考える。(S)

「思う」や「考える」に上の例のような「私は」という

判断主体が文中に数多く登場し、「思われる」も「私には」「個人的には」などが出現するなど共通した傾向にある。

大学生のレポートにおける「文末思考動詞」の使用は、思考内容を明示して自己の見解を表明すると同時に、個人性を強調し、論拠不十分なための個人的な意見という消極性を帯びる傾向にある。

4. 学術系雑誌にみられる文末思考動詞

4・1 「思う」

では、学術論文においてはどのような文末思考動詞が使われているのだろうか。『日本語学』(2012年4月期～2013年3月)に掲載された論文から使用された文末思考動詞に注目する。

まず、「思う」が用いられている例を挙げる。

(53) 多少偏った内容になってしまうかもしれないが、筆者が実際に改訂に関わった辞書を例に、国語辞典の改訂がどのような方針によって行われるのかを紹介していきたいと思う。(2013.2,p27)

(54) それぞれ「異国情緒」「笑い話」という表現があるように、方言は活動をいどころの話題の一つになっている。それで済んで何よりだったと思う。(2012.5,p45)

(55) このような感覚は、新しい世界に生活し始めたことによる文化的な差異から来るカルチャーショックであり、特にことばが十分に操れない自分が、周りの世界を理解する上でも、また周りに対して自分を表現する上でも十分にできていない、あるいはできていないかどうか確信が持てないことからくるもどかしさのようなものだったと思う。(2012.7,p47)

(53)は次の展開に言及するもの、(54)は個人的な感想を述べたもの、(55)も「自分」という語が出現するように、過去の自分の体験や記憶に関する事実確認となっている。なお、(53)のような場合、他の論文ではほとんど「たい」「(よ)う」のあとの思考動詞が省略されていた。また、(54)(55)の「思う」は判断主体の個人的な評価や感想であり、研究の考察部分に出現しているわけではなかった。このように、「思う」は私見を述べる場合や、本論の外で論文の位置づけや筆者の立場を述べるものにほぼ限られていた。そのため、「思う」の出現は口語的な印象を与えるものであった。

一方、「考える」は「思う」よりは多いというものの、少数であり、文末で用いられる例は少ない。

(56) そこで本稿では、これまでの確認要求表現の研究を参考にしつつ、地域差や世代差といった動的な側面に焦点を当て、日本語における確認要求表現の広がりについて考えてみたい。(2012.5,p66)

(57) 語源とは何かについては考え方がいろいろあるが、私は語の始まりを語源と考える。(2012.6,p4)

(58) 私は、まずこうした現実を十分踏まえた上で、学校教育の現場における「言語力の充実」について論議していく必要があると考えている。(2012.8,p27)

「考える」は考察の対象や作業方針、作業の課題を示す(56)(58)のようなものと、「仮定する」「想定する」に置き換え可能な(57)のような例で出現する。これは、大学生のレポートの場合と同じである。しかしながら、(58)は一文だけを見ると「思う」に置き換えられそうだが、「こうした現実を十分踏まえた上で」とあるようにデータに基づいた思考の作業が行われた結果といえる。

4・2 データに語らせるラレル形

これらに変わるものとして比較的多く出現するのが「考えられる」である。

(59) 一般の施設・団体で学ぶブラジル、ペルー出身の学習者の中には法務省告示機関に在籍する学習者ももちろん含まれているのであるが、日振協が同時期にその認定校に対して行った調査によれば、在籍学生数上位一〇の国・地域に南アメリカの国・地域は入っていないことから、表2に見られる南アメリカ地域の学習者数のほとんどが一般の施設・団体(法務省告示機関を除く)で学習しているものと考えられる。(2013.3,p10)

(60) 因に、『十卷本和名抄』では、「鶏頭樹」を「加比流堤乃樹」と訓んでいる。カエデの葉が蛙の手に似ているからカエルデと名付けられ、それがカエデに変化したと考えられるのである。(2012.6,p28)

(61) このように、言語の構造面においては同じような変化を辿っているにもかかわらず、新しく生じた言語変種に対する話し手の把握の仕方が地域によって異なるというのは、注目する言語要素に違いがあるためではないかと思われる。つまり、接触方言を構成している出自の異なる言語要素のうち、仙台市方言話者は標準語要素に注目し(あるいは、方言要素の少なさに注目するために)、自らを標準語話者と捉える・方言話者と捉えるという違いが生まれるのだと考えられる。(2012.7,p73)

(59)はデータをもとに自己の見解が客観的事実(状況証拠)によって必然的に形成されたことを述べるタイプである。(60)も根拠となる事実を示して見解の生ずる必然性を述べるとともに、対象の読みとり方の可能性を示すものともいえる。(61)は前の文で読み取りを示して、それに対する一般化の可能性を提示している点で(59)と共通する。

しかしながら、「考えられる」も頻出する訳ではない。各節で論じた内容の結論を提示する場面で、ラレル形文体の〈ことば視点〉を利用して事実やデータに語らせることにより、自然な帰結として導いた結論の蓋然性の高さを表示するものとして用いられる。他に可能系「～

といえる」や発見・確認系「～がわかる」、帰結系「～ということになる」などが用いられる。

(62) このように考えてくると、海外で行われる教師研修の場で必要になるのは、自分が日本で経験し、自分の現場でも再現してみたいと思っている何某かの活動を、現場の文化土壌の上でどう計画・準備し、実際に進めていくか、そのプロセスを考え、実行できる能力ということになる。(2012.10,p65)

このような文末表現自体は大学生のレポートにも出現する。しかしながら、文章の組み立てが相違する。このとき、上で挙げた論文の「考えられる」は判断や結論を導いた論拠が十分に示されており、文の構造は「私が思う／考える」のではなく、「状況証拠が我々に語っている」となっている。そして、「考えられる」の主体は判断者(筆者)自身だけではなく、その証拠をともし見る読み手を含んで不特定多数になっているといえる。

5. 「思う」の伝達の側面

5・1 思考内容をマークする「思う」

では、なぜ、大学生のレポートには「思う」が頻出するのか。前節では根拠の提示不足という論文の組み立て上の問題を指摘したが、もう一つの要因が考えられる。それが伝達の局面での働きである。

レポートに先立ってレポートの主題・問題意識や根拠となるデータ、主張の内容と手順などを各自に作成させた際には「思う」や「考える」は出現しなかった。宮崎(1999)にも指摘されているように、ひとりごとには用いられないなど、自分のための覚書としては不要な形式であることがわかる。そこで、森山(1992)が「主観明示用法」のなかの「主張を控えめにする」といったものや、宮崎(1999)においては、自己の見解の「述べ立て」であり態度を「宣言」するものであるとする点を伝達の側面という視点から再考したい。

宮崎(1999)は「と思う」は「引用節の内容が話し手の思考であることを外側から注釈する(モニター化する)表現」であるとし、「文の思考内容化」であるとする。また、「だろう」は思考内容に含まれるため、その場で新たに成立した思考を表せるのに対し、「と思う」を付加すると、「話し手の思考を外側から注釈する」ものであるため、思考が発話の場面以前に成立している、すなわちタイムラグがあるとしている。

シモン(2006)⁷⁾は、これらをふまえたうえで、発話行為の責任を負うものを「断定者」、発話にあらわされる視点のソースとして示される人物を「視点者」と呼び、話し手(前者)と見解を主張するもの(後者)とが分裂していない(同じである)場合は、「発話行為の責任を負う断定者が登場し、個人的意見の断定という発話行為が行われていることを示すマーカーとなる」としている。

表現はそれぞれに異なるが、これらは、発話者や筆者

が提示した不確定・未確定な情報について、不確定であること自体を示すのではなく、思考し判断した者が発話者(筆者)自身であることを明示する機能を持つものであることを述べている。

5・2 内向きの「述べ立て」

大学生のレポートによく出現する「のだ」にも「思う」と共通する側面があると考えられる。

(63) 右向きの矢印を見れば右を向くし、左向きの矢印を見たら左を見る。矢印は視線の流れを作り出しているのだ。私たち人間は互換の中で一番活用して情報を得るのが視覚で、目から入った情報が他の五感から入った情報よりも多く脳で処理されるという。矢印はその視覚からの情報を得るための視線を誘導しているのだ。

(64) 下向きということは下降していることと同義であると人間が捉えているため、もし「だよね↓」というメールが送られてきたとしたら、我々は書き手のテンションが落ち込んでいると捉えることが可能になるのだ。

「のだ」は対象に相応する概念を発見した時、自己の疑問とそれに答えてくれる文献の記述やインターネット上の情報を関連づけて主張するときに出現する。上の例の「のだ」は付加されていなくても意味に変化はない。このような「のだ」は「のである」より口語的であり、レポートの中では「のである」と共存する。関連付けを行ったのが自己(筆者・発話者)であるとともに、自己の内部に生じた「納得」を述べ立てるものとして働いている。いわば、事態把握を行う経過と結果をライブ中継しているようなものである。

「考えられる」のようなラレル形の効果も、先にも述べたように、根拠となるデータや状況証拠が不十分であれば発揮されない。シモン(2006)が「思われる」について、情報のよりどころを示す断定者は特定であるが、ソースとして示される話し手である視点者が不定化するため、主張を和らげることになる可能性を示しているのも参考になる。十分な客観的事実や根拠となるデータを提示できていないために、伝達の場面で主張を控えめにすることに働くのであろう。

以上のことから、大学生のレポートに出現する文末思考動詞やそれに類似する表現は、以下のような機能を持っているといえる。

- ・主張の個人性をマークする。
- ・一般性を語る視点に寄せて主張を控えめにする。
- ・機能を持ち、個人の内部に生じた事態把握をモニターする。

これらは、論拠の不十分さとともに、他者に理解させることを意識した論証のスタイルが未成熟であることを示しているといえよう。「述べたて」が個人の内部に向かっているように見受けられる。

6. むすび

以上、大学生のレポートに出現する「思う」と「考える」を考察してきた。その結果、次のようなことが明らかになった。

〈出現傾向〉

- ・ その語句が持つ基本的な意味の範囲で用いられている以外の「考エル」「考エラレル」「思ワレル」は、「思う」に置き換えが可能である。
- ・ ラレル形の使用は、客観的状況証拠を提示した論理の組み立ての最終段階で現れることは少なく、可能性の提示か、主張の和らげに働いている。

〈要因〉

- ・ 語彙力の不足
- ・ 論証の不十分さ

これらの背景には、データをもとに論理を組み立てていくことの稚拙さや未成熟さが影響していると考えられる。レポートとは、本来、事実などの客観的なデータと個人的な見解を述べるものであり、そこで、あえて個人的見解を述べることをマークする「思う」を多用する必要はないはずである。根拠やそれを保証するデータの提示と思考の積み上げの過程が明示されている学術系雑誌の文末思考動詞は、それらを代弁するものとして存在しているとみることができる。レポートや学術論文における情報伝達や自己の見解の表明には「データに語る」方法が必要不可欠であり、そのような方法論の習得が重要となろう。

参考文献

- 1) 森山卓郎：文末思考動詞「思う」をめぐって，日本語学，11-10，105-116，1992.
- 2) 宮崎和人：モダリティ論から見た「と思う」，待兼山論叢，33，1-16，1999.
- 3) 宮崎和人：動詞「思う」のモーダルな用法について，現代日本語研究，8，111-136，2001.
- 4) 高橋圭介：類義語「思う」と「考える」の意味分析—類義関係にある語の多義記述試論—，日本語文法，2-1，190-210，2002.
- 5) 藤田保幸：準引用，待兼山論叢（文学篇），15，1-16，1981.
- 6) 工藤真由美：アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間表現—，ひつじ書房，東京，1995.
- 7) シモン・テュシェ：文末表現「と思う」の用法と話し手の役割，日本語学論集，91-103，2006.

引用資料

- ・『日本語学』2012年4月号～2013年3月号（全12冊）大修館（当該文章様式であること引用の目的としたため、発行月とページのみの表記とし、詳しい出典名は記さなかった）
 - ・ 例文末尾に（S）と示したものは2012年度愛知工業大学学生の「日本語リテラシー」「プレゼンテーション入門」において提出されたレポートから引用したものの。

（受理 平成25年3月19日）